丹鶴叢書

風葉和歌集自六至十

和書門
類 二九三六四
號 一〇八
函 一三
架 一五四
冊

内閣文庫
和書
類 二九三六四
號 一五四
冊 二六
函 一二
架

内閣文庫
番號 和 29364
冊數 154(115)
函號 216 2

国立公文書館
National Archives of Japan

神社庁文庫印
教部省文庫印
図書寮文庫

風葉和歌集巻第六

冬

神無月のつごもりのころ

神のうへにまうでたりける人

たゆたきのうちはらへの女房

乃のうへ

さをしかのあとをとへばくもゐる

たいしゝ

あさくらの乃宣后の内侍

いつもかくもとゝ神なる月をへいとゝもしぬるかな

女のもとにまかりあるまつりける

このいまみの右大将

内一二九三九號

舟鳥文書

神な月しくれはかり衣けさの袂をいかにしほらまし　いかゝ一本

まのうらにあまみなく侍るに秋しくれのちかく

なるころの音しき思ひのこひもかく

残んおすみのたたね

ふるとみし時もしらす世の中にあきにあり

神無月ついたちころちふくやをこえし侍るに

八重のおとみ侍るやまの桐ことにおもしろしとおめ

さへきこえたるに　よほと立てのよんて

総角

秋きてはむしもまさる木のもと残ふきおすくるそ峰の松風

右勝つ歟

同上　こ物語

いつよりも秋はゆふくれ山里の子家のかなしきすまさらむと

まいりてこそ

ころとかへたやのこともの心すまぬ

秋きてはものあはれなるこのころに我身もしらぬ

なかくまち侍る秋もみちのちる残りて

あさまやまけた宰相師康

こかしふちにくるもみちをは相見る人のなかの宮

旧季もの都乃中に

しくれのまへのこころ

え源くそめしもみちは家ぬるを何と世にふる時雨なるらん

かくれ月きのちくまいてするも日女につきやる

こまかへちやのさいの太政大臣

おもへハんも宮にみえつゝしられよそふる我なみだかな

いとせちにおもふことを侍るころうちしくれてしくれ

さみだれは　うちしきて木の下ね

それならぬ心や宮にまよふらん涸しくるゝ袖のうらくのみな

まゝ人におもひましたる母宮の院の皇太后宮のまし

いなくさうにおもひする法印まゐるよにまとのに

くもましくるれハよまゝ世給ひたる

さころものしるしの御哥

人しれずおもふる袖もちかへると时雨にまよふる濃哥

まへてのことさへにつるをゐぬく侍るころうしくれし

ならいはなは法つさゝせまひ宮する

秋の月のうつかのさかりの御哥

みちくらへのおやいるらんさもおもしゆ袖もの露ある时雨に

山さとにちさしくる女のもとにはねずつれもちとし侍ゆう

しるあきらにつぐし侍り

祢さめ乃関白

はらくまとらいへやるみ山ほののしてれのおとめといのは

まいしつ　おもの宮こつる三位中将

ものおもふ人のこらのたえみゆまたくぬ时雨のおとそかなしき

みてこころゆくるはしたうおもてさせ給て
さわくるころしるしるまのおもまほふとこと末ほふとこそ
さをもむく　うたねのさちいのこと
おもこそぬしくまたしつくこそ　とふ武蔵人のつらまうそ
ぬしこの書たくるこころしるまをゆあしく
をるまのをいくは後の女御
をるまのこそぬをこのしるもをこそ神のぬをまさらん
ものはしくるころ月のよをふかをこのをとくし
くるとをくく　あふをこくるを源大納言三君
むこをめよ詠る月もをこのわいく時白にぬるこ神のなを

をつをこる女のもとにまかをとく書ふてをつを侍る
道よ月をこく　ふねのたゆたに
かくこめ家のやとも雪をこをこをのをまもをる月ふ
たたねるみふせよすく侍る冬のころはをく
くる　ををを河の水中納言
ゆををこ三位のあしもいをるん於もをる風のくをふ
なねをのすみ川のををこをるく侍る乃ち
松風のをむよまふ年を屋くふをるをん
をくをををこくもく侍るをて
うをの海産をを言女

国諫下

いとりぬるよさもものやこけとうすきあをいろの風こそ

女のゆくへおもつのなくれもほのちやこそるしたとそ

あらもとのくちもあをふるなるもりと御らんし

く

さこそるものこそるしたのあをい

物語二上

百番哥合三番

はるのものくるものかこの

ささの内侍のみ

ふのうるむもそ雪ふるあをいろのふるそとうむ雪あを

女のもとうもとるくよかとうあさまつ

のそしくる

参河のさこそるはつ雪

拾百哥合四十二番

あをいものおくをそくるみの日しくもそ物をもあを

女院のみそけ

うの雨

みの日のくもちくしの清くるあをの雨をたくさや

嗟嘆院のさいのこやの御宴の屏風まあろ

あるしのふ舟もこそうけくる江

菊宴

うりの指井初之恵結

こそ清ねをとそこそふとて物語

小四上

冬日上

あをふるあをいの舟とをしぬる江

うちよそよみ侍言

総角

この殿大将

百番哥合七十六番

雲あをゆるこそ八のくるるちをて江るる月をそ行人武

うちの井君

総角

ありよの君をちかひ捨てし人の心やうる

拾百貫合九十六番

女のゆくへをたづねこそ子鳥のなく涙やて

しくれの中持ちまさる

さよちどり友まどふこゑのうつるこゑをこいなのうつるやうにて

捨てしうるもうつる水鳥の乃こゑをあまさよ雪

まもむしの指井納言

かくこそこの神代に弥るみのよ涙のこゑ弥とよふや雪

うもむるこゑ有くあむ俗ちかうる女のこゑ

あくく池のみるのつひふをあをうやま

くるんく

おやこの井乃内大臣

水のうつ水ちるこゑ弥ふもつのふるれあしあ地ハ

池よ水鳥ものあをを市淡ーとくちやま

うくさらむほくたほーちまとれて

うたねのこゑの市河

ちのうつかものうくこゑ弥とをくくてるんくをん

女二のこやのをみるひる一条をものむくおくまよ

しまくに池よるるをーのおるふも同

沖くよおほくをくて

八之八一本

さくるものこゑ乃市河

物語二下
百番哥合七十六番

うらもとハうらむもをしみのうちにつきぬをのうらなみもとも
女のもとハまつもとをくるふつきをうらとなしハ乃
をしのあくるをしらめく

たゝ世うの掛家大納言

あもふをうちうらハをとゆるおもをよたくへすおくと
あむらいく侍くる女のもとをるをるく侍くるうら
はをしらこ言る　ふをうのうちまのうみ

小一本

みのよもあもをぬをしのうちうらハ上もの雲をいふをよそ
白手物語のなるうよ

ふほのうらみ

ふうくるみをのうをすの破つらひるへ定めぬ事ふ一な
かもの沖ふ
人めゆるつらのうのうの秋んうくるあみ乃うへうの
女とおやのうこををくへ侍るにものをくまうと
なうをはよあうて
さうをけ一あ月の実白
いうをもむうをうるみのものるるをもを社のつらと
をんふよつのを一言る
ゆうをうれ二のうて
おちはる浦八神よ歩つふ社をうをひのまうな一

ちるのあわれはなりにけるふるさとのもとにつ
もるよりはくもりなくさえわたるやまたかみまつ
むしのねもえもいはぬものなりけるよ

むしのこえ　ひとしき人

朝貞

ひかりいまのわかゆきぞやそしまの月の影なるく
八重雲のそのかなたにかくれてはいかにまつ月
和清なりけるかをたづねまつ

さはりなし　秋の峯白

ひかりなる秋の水も月をまちおもひいるるまとゆ
須中将

ゆきとふへきかたもなきものなれはなをたのもしき
たいしんの
はるかなるこのさとにあるこのさとにふる雪の月
はるかなるこのさとにあるこのさとにふる雪の月
ちりそめの女院のうしろ白いそこそ
さとをはなれておほよのこもるにうみるさま
みるこころをさせるにうれし

六条院おもむき

朝貞

ことはこそ秋ぬねをさしもみのふかれつる菱のうきさ
百番哥合三十六番
さそくんをおもしまくる時はつのそふまるて秋よ
よるなれ川のうるくみさきの水とちとめてお

ほむ舟もえそすまさやしぬよ

さころものこゝろの御かみ

物語二下
百番哥合七十八番

こゝろゝは氷のしたにむすほゝれさりとかへさるよしそなき

小物語
さす日上

女のもとにまかりてむつましきあし

よみ侍りける

おやこ乃中の内大臣

ひとり寝のよにかさねぬる淋しさはまことにさへぬるかへしきの袖

あさちのまにむすめつのそしける

夕きりの左大臣

少女
むかしのけしきもしるのくめやとめてあまのも袖はかなくんと

まか一本
物語

こよのあかりの花ころもきみもよく侍りけるよまつ

か一本

丹鶴叢書

とて夜々の月のおかしくさえわたりけるに

こゝろ/\の大ね

后一本

めつらしき世のあけのむかしのけしきかくはうつもれし雲ゐにおもひいて

まことにおもひたえぬるやうちもとくるをおもひいとう

しのひもえて　大納言典侍

むかしのかくさかりはいとゝ雲ゐさえて氷やむすふ山のあゐの袖

志のひさゝる事を乃ちむしかへりのまとむる人に

の本

さわらさくるまにくるまのかりあかりや残さしいそく

つかはさて馬とらちのむすはるに

五たち

ちとのさる山ゐの衣めしてゆきすがたいとをかし
夕くれの空の雲ゐにいとすこうもとまるを
ゆふ月夜ちかくなりぬるほどにかすみもて
ゆくうちの中天

総角

あづまなる人のさまの歌ども
世ぞのもむかしいまはゆかしきものの
ものよりあはれにかなしきゆくすえ
あまのうきはしの橋立の
女院ゆくへもしらぬあづまのあくの

十二本

八物語

拾百哥合九十六番

ゆくへもしらぬ雲の和平ゆくへ
いとはるかなる女のかたちのあはれ
ゆくへもしらぬ雲のあはれ
みあさぢの左兵衛督
うゑやまうゑの宮ゐのあはれ
みのころのようにひとふしすぎぬ
くるをまちくるしきあるこの風のおもいたし

ゆくへもしらぬ雲のあはれのおもて
ゆくへ
まをふの宮の古天皇

於

国立公文書館
National Archives of Japan

三月出て

めもあまぬの古大尽

山海くさの色ゆるあらまつやそてくたしくあるこをぶ

よし野山よりのつるみるく侍るころもの色々

出て

濱松中納言

物語四　みくしもと物語

あかつぬめつとよし野の山よりをふきいしくへやたえんとそん

くしはなとみ侍るくへよりたをしかる

同上

きえかつをしらしやるとふきるめやよし山のふるとと

大納言とよりの七十賀の屏風よ山よりをくく

ふれるあるに　よみ人しらず

落久保物語三

をしなくつりくのちしら山里よりふるとくてくる人のなくさい

雪のあさふあまれとふ千代おくて分あま

たよくくるものふ　ふくよのもの上人

道くゆるこをやうくむふるをと春くをもくの人のまくれ

ふくをのくくの春よくくれくいのるる人の道とまつむ

中文のをくあつ　おくまますくる千代六条院おくる

しくくくるむとしらしくふをくくくふをに

をるふをやくなくむ日まくいのしおほつあく

むくくめ乃とよ中くる　侍本

あのしのうく

薄雲

をるふくくくくの山のくくふくまをしらしかくの人改くをく

ミち物語

よし野山にて雪のふる日よまをと給ひける

よし野の女流

ふきおくる人あらはいひてまし我もくや雪清かるらみて

おなし山にすみてこそいはんほとこのことつくるによめる

たまくつの御方中書

物語四
拾百哥合三十五番

みよし野の雪のうちにも住をひぬいつちの山をとくはたつねむ

女のゆくへしれぬ事なりて侍けるふるさとにて雪のふる

日むつましきこのめくかつらとてよめる

かたちきの女房

たつぬへきこのくもあくてそ世にわかぬる雪をかんてよ跡もさねと

四季女のくる〳〵みな井中に

ゆきの下かの御方

志らぬ雪のはてて流をむすまほしむすふ水の便あれて　一本て

なかしのつきさま人くて侍ける清雪の寄しかまこし

つれさを給ける　まさはしあるよの朱雀院御方

春よをひとひおつるをよかしききて身もさえつる雪のふかく

新大納言女との辺りく高野きをみ侍けるに

雪のふる日清きさを給ける

しのその流の御方

都々またきあへ降る白雪ふかたへのおくに残はいまやまし

この御哥をとらんくも雪降らんとし御心も清いのう
まつりことにこゝろと思ひもうれし侍りまてよめ
る

新大納言

むかしをしほの山の小松さまて思ひもくも神さぬまれる
六条院太政大臣にものかたらるとくおほやけ様
の行幸まつりまつりもすへての御事この後も
ことなりとものゝみのよしなるせ給くさ
も侍るさうなるにそうしてつきを給ひて

冷泉院御哥

行幸
百番哥合九十九番

雪深きをしほの山にたつきしのふるき跡をも今日ぞ尋ぬる

同上

御心のそこし　六条院御哥

あらしほやみゆきつもれる松原にけふはかりなる跡やなからん
雪のうちにのをやる大将まてさて見えぬ乃
うちことをとやつのうらにゆるしとへ侍りけれ六
うちのおねさみ

推本
百番哥合七十八番

雪深き山のみゆきし今日こそ跡とゐぬの哥
まみるつらしけえたる人にいてはりて
えもいはぬふるる花の枝に結ひて給
をとゝる

さ衣の後一条院御哥

物語二下
百番哥合九十七番
之百

雪のめつらしくめつらん花のもふる白雪のさえさてさとて

御法のくし　為流

ちかうやハするくれ廿のうきくのさきとちまさのむしん百

同上
同哥合廿八番

まのよもちかたのむしん廿のさふかう行る雪のさくえて呆ふかく
ちから係なくは侍るところ弁白志のむしてまうく
こそてやの法のすさるあつさのきうとはさちかそ
こを侍る

かやちさきれの宣耀殿女御

うきみ八身のうつもる日雪のさくえくつてもふるそ必つきき

かめし

なほもこれさえ払へつし身ふねハふりて雪と仰かいてん
少さく小侍る女のもとに雪のふる日つかはしける

串さこは風の宰相中将

さむしやと思ひけや正し雪係さく白雲の雲のくちとを（本ノ）
佛名ちとこそしまちまふてそハとおほめさく
此導師のさくつさ乃法いつてよよきを給ふる

幻

春まてのいのちもしらぬ雪のうちにいろつく梅をけふかさしてん

六条院御哥

御返し　御導師

千世の春みるへきはなといのりおきて我身そ雪とともにふりぬる

同上

さきの院のきさいの宮の御賀の屏風に仏名
しける所　大夫将監のまへ

ひろうや物語

菊宴

かくて行る仏の数しおかみ三千まに一さいひちよしきやくらむ　さ日

らしのくまにてよめる

一の宮またゝるの后に文字相

雲ちかき葉かりしの数こにむかしのよろつよを思ふ

風雅和歌集巻第七

神祇

ちはやふる神のかきりは白雲と絶ぬやはらくる

こゝにてふたゝひのことしも中々の御うへとお

ほむかむとつかふるかおほしめすらんは大

神なとおほしかまへてまつりせらるゝなん

やすらけく我まつりこたへむかしのたふとき神ともはうちつき

御身のうちの御託宣せさせたまへしくおほしめ

さるゝ礼は寛白春をめてまつらせたまふ所に勅

使をつかはしさせて幣ををさめらるゝへか

物語下

同上

物語二下

（そめ物語）

物語

あさましくてこそこんこの世ばかりの世もさることなるべきやうなんと
ばかりにて風よりもなほさらに世の中の人の
さまもをかしくなりぬべきやうにまことに
侍るべきものにもあらずいとけうとくさまなる
人のはかなきまつりごとなるべし
おのがものなきなさけをまつのかぜにかかるあのうちのうたの
こまとてこそうるはしきものの事の事白女をおくりかへ
世にもむかしにはべるもとくさうのうち
ふはべるとてかすかにまことさまにけあらぬ

物語中

たまのこしかはりてあるあのつきうふうちかはりて
まるゆめよふちのそとをかたくのこまをを
くるるもん
なごのほうきもをきんさまちのうへの人よ三六さまに
こまとてまつのの文の宮矢宇相うちをを庵
のうへはのひまつはべるけいさおうく
世のこれいそうるべかのおかやのいくさ
ふまりうくれ我の神仏と参りこまるか
馬くまてのうちかきぬ人九人いそさ
くもろもよまくのへうてうちつめ侍よ

久しきうちやすくさるよの夢ようこそ侍る
さてみよしの清滝ふるんいむつくへさる
あふさてはいさとをのうくたえつくへつもるあしや
大江たていまみの女ねのゆくしぬをと
さくようにまうてゝ侍て呂子人よふす
みよしをもてきうこうこうんこうこの白浪と
よみ侍るよえもいをひるくさ秋ことの
音をひまく法ゝ侍るむ
杜のよの松ゝ風のおとよりも衣多すむ法のこゑ
これいまをぬまの浜ねをみうふこあと

くこと法おとくおとるひ侍るあつさ法
ゆはよたてふをくさうおくて侍るあふわ
さるくくくくもまうて侍るをもて神乃
ほをくくまやとこんくむくくくる
かくをわ地ゝ人をあゝ上のたれ多すむ衣あるらん
たたねのくくくくくくるくくんをつくくる
くくおを面あまよたふまぬをくくくわけ
るとたれくくとほをくくまゝけるおくて
ほくくおくくわゝくくよくくたゝくくる
かくをたのくくくくの面文

我ゐるふねをまてる神のおのをうくてやすらはし
やすらふまくてよみ侍る
をゝのぬまの古屋
ちゝひおきて神のつとたのむ人の人よりぬるをかして
女一宮高倉よるもとゝたやうん
とおもとをとくよるを拾ひくる
秋のゝ草のしつくかの山
ゆふくれもちひやわるゝん人神のいとよりめゆむる
かゝる所の山たゝよりみかゝよりもとをとゝ
さゝゝ宮のさしてをしるる人をとゝけるせ

くる海のうゑ　おなし赤地の母后の宮
かゝるあよさゝ宮をして行てやそのゝ社をしるらん
海也おなしうしをを拾く玄義ふまくく
さを拾くよるせのひくる
風よりをさゝの山陰
ゝゝて行てかゝるゆふくれ
かものつさゝ山の世の陰神よりまつを川
さゝよ内大臣まつちゝもそのよ世ゝ
よりしも侍ふまて
ゝゝしのの高倉中納言

さらてたにふしのまもたへかたき人のねさめもわれに
こゝろくらへよとてや秋の日ころ
みくみやこにおもひおこせてほのかにみえしこのはさ
つまはいかなるなるにか又とゆくかものいはて
こゝろはつねにさはかしとみてもまとゝたるに

さころもの前斎院女別当

物語三下
かへりては神もうらみん我こころをまかせかほなるさかしらにて物語
六条院すみよしにまうて給ひけるとき御かたの御車の
ふかくまうて給ひけるとも御よそひかくかの袖の
ものゝやうろとこの事ともやひとほと前斎院の御

京にはみかとの御すゑしんかくはなれまつりて
こと思ひそへてもおなしく御車のうちとう
くゆえける

源氏の太政大臣

須广
百番歌合八十七番
いつかまたあまつかさしそのかみの日みつゝしらものゝつゝく
やそよろつのかみもあはれとおもふらむろのつみとはうみ
の上神よまもりつゝやたまふらく

六条院御歌

同上
同歌合四十五番
うき世とはおもふものからつらきかなこゝろをくまん名と事ひの神もまもらく
身をつくしこゝのむかしをおもふまゝるよしなきえ
けふまてかゝるのたつきふかくもまかにかはらしよ

たてまつりしよつてくはたまやを拾ひる

ささらうのこと

神さまよりはまるものを引へ一宮寺と思ひるな

御の歌

ゆてまさかくもへの手れたハ雪の面さてとれてこそ

神と言月十日ころ平野より幸侍るよ高流

乃ちうとのもみちいこうさらとよ御らんし

ひてさをのく

物語四下

神さハ杉の物語の物語

さころものこの御宮

きいしこ

うつの手綱すけもみ

藤原君

めるちのくおちくいのまとかをけもの柳ハうもうこ

龍吟出家し侍くゝ又のこ一まこそのむつさよ

いなりの御幸のまも侍こうまつりく侍る

かさしの杉ものこのこのるこるもちおほ

めもしくれまハ

あまのり天の流御宮

杉こ神さくつしいるこ山こよ枝のこ一あくう

六条院すこ一まくさ世侍るよ志のハ

くまるりてよめる 源一のあの一のあま

若菜下

むのこ一こまつこすれ侍この神のこ一こ八つ

おなのこ一こ世日の月ものよすくこみのおて

おもしろくこゝにてつるは雪のいとしろくおきたる
松もいろもまかひぬへくよるのまにそこはかとなくさむ
さま　むらさきのうへ

若菜下　のえ物語
すみよしの松によふかくおく霜は神のかけたるゆふかつらかも
六条院内大臣と申ける時すみよしに御願を
たてまつりてさと後は神のめくみあまね
くめていとゝ思ひやしも侍ける
[illegible]惟光

澪標
すみよしのまつこそものはかなしけれ神世のことをかけて思へは

拾百哥合六十三番
すみよしの御まつりにまうてたるに侍るかつらかまう

てよみ侍る　いのいまみの太夫ね
ちはやふるあかりとたのむ人は住よしの松のこすゑのつかさなりけん
みかきてる月の中納言のことをさやけく月の
ひかりむすみよしの松とのとまりをみえまて
七川和のもとしの御息所
住よしの神もときにおまもちに月を此八条のあさちにしと
このゆめのたのつまの宗かは八月十日すみよしに
まうてよめる　あまひらしむの大弁
いのちもち神のんもすみめんに松はふかる月もおもはれそ
こそはのまゝむしめとみえ清かそし宗まる

少女
拾百番合四十一番

あめよりもひさしくとをむめのまくらかたしきてとはるかの
のちのちとせをまちとて内侍西のおほきめすの母
ともおもふとて　女さうみのたゆ将
神もこよかるおもふともむまちにくるまにの我くのそ
すまのふくやうしの法いまちよいてきくるこころ
日神さくもきもせめつこと

須ア
百番合八十八番

やほよろつ川神も表ふ系統神ら
ほこんおをるつこのそれぶれハ

物語三下
百番合八十八番

こころをするやそ方よの神もきもよわ法ふ品いそめて
きくよおそもまつ久ときを神も家おほしめ
こを法ひるをかろ歳の大明神塚に法よつけ
ゆめのまとあとく神ほいもとをたまもく
こやろよくさまし品のつ法ろ歳きこの世
法く神んのちよ

物語四上
神も打もとのん歳こつをみよこの世のきもとをきもん

釋教

むしのよをとんでとりの契よるもむつまじ世をのがれ
こゝろをあまのうるものは大納言忠房卿
まつをよこのりをとくかるもしへやあるとまつ
いぬふせをこゝろうるもこゝろのさいて
ゆくるもこゝん
こゝろをふるんでやふるの月をよ詠めよ
ふれもちよくるたゞものゆくる女の后
まもち給よくる歳しておくこゝろの多
ふ石山のうしてまの教のうるかをつくるる

しをの歌
かくもくすまむこゝをかくるめいをよ山のまに月
ゆもをもんの釈尊こゝしの内大臣乃
ゆめよはてゆくるこゝん
まのてもこゝをこゝをほの時のまに成ものゝ信仰
こゝをもちまのうもの中の名おくゝもこゝろ
まのてくゝ方のゆくへゆくるよ御孫のこゝ
ふくゝおくゝもるこゝ信仰成ものゝ石山寺
ふくゝこゝくゝおくゝくるもこゝのゝのあるも
秋方むこゝのもこゝも孔よくんこゝよみ信仰る市

この屋敷の内のようもん
かなたこなたへ流れとうみよ堀本もふさぐまでも有ればこそ
こまたちうりをしぬの間大原の中まの川
へたてぬさまになるひしかれるもせようこと
まるまるとかくるころつまるようもつてこの
まてこんうるふ本もと流れ侍る絶えて言
むさくるむる絶いのつまりもしをさまるに
くもりく祈さんこのまめやとるいまこのまと
ろつて侍るようまいのてらの師のたくはく
おほきうまは侍るなかく

きの別や芝斗ちるあふぎにもさうれくどうこそ三つのん
こまとのてうさぬるこの大根いをもちよおりふこと
侍るは侍海よかもちくおこふむ侍るふ芝
うつてもつてうさうさうよう法々侍ること
なむ
さつまこそをきもらめ妹を川絶よまよちれあふ
大宝ちあるとの侍ふいきうよのもくもちぬこと
と絶なるこくまふこかるたつたる芝
ふこ侍るとふ
ごころつこあるこ侍るころほこの女の

ことをこそ　つくる　ふる　ひの　はすを　ふく　こゝろ
いと　をを　ゆく　かぜ　かぐ　まこの　たたる
まきもくすて　あやまつと　我　なる　世を　一法　をこ　ゆる
八月十四夜　てらす　ゆく
いのて　ゆく　のこる　ふる　すむ　月　とは　のこる　そら　をも　もん
うの　月
たまこと　こと　つの　ゆく　とき　ゆく　ゆく　の　月　ふる　すむ　つく
おこと　人　の　こめ　ふ　善　吳　菩薩　つく　ま　おも　ゆく
まつ　こと　おこる　ひ　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　の　月

くま　ゆく　こと　入　く　清　の　こと　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく

風　つ　と　なく　の　こと　白

ちの　ひ　あく　ふる　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
きて　こと　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
まつ　ゆく　ぬく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
く　ゆく　の　市　車　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく

ちまかの（一本の）女　ゆく

夢　の　ちに　さつ　と　こと　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
おなし　てら　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく
ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく　ゆく

おふしてかたてる木まもたてところる都をハくてもるく
すめのものくるもの中ふ方便品をく人敬礼ん乃
至以一華供養於画像彫畫之者牧佛
仏ものくを四しをの一ふくふかをの仏をこるをくをもる
人記品
うれをてふくを山人のうもれをを思をハをの時よくるふ
観持品
ふくを四をハてくををぬをふゆを人のくをみをもる
神力品
いしおをくをこのをの法をしをもをなをん改のくををよ

院のふくん御經ちやくもんしく侍るよいつ
くのをふをふをを人の中侍るを
おまのもをしの流形中初
水のをくのをくをもるを世我いをとをるを法をれよ
をアをのをくをのをくをふをもるく法をんをて
ふをのめゆふの冷泉流女一宮
涙のをくをる袂よかをくををまをるものをのむやををむ
女流の御をふををちのををををるを侍るを
いのをの侍の人をを人者病治少是經をふ可を
ををむををく　いをて志の二条流内大臣

ゑ一本

ちかるみのうらのもあしに袖ぬれて人よのうるいのちハ
あまもそのあよハ講おこまひく袖ぬれて
ゆひくるよ　おのれなりけるかたハ
君のゐるつとめもしめくこそ文よ見るむる法のんしるん
けせをとろれたやのほいもさほのゐる方の袖て
とひいさむくくもたにのるこて
山おさこの内大君
伊のとんよこひのゐるとしむらんこの車よのこ孫ゑて
紅よむいむなのうとくへのいむるをて
あまやこう乃女御

まこを舟のうもこてこ
古大将のまこの君ゑ
し伊てよめる　江
さう方こたのまこ心さしつるこの毎のこのるへこ
をこわよのここてこ
とくく士言こ宮様の
伊ゑまこて
あ孔ゑくの大納こ大君
ゐくなるこ心こ成こくもみちものやほよむこんこ
いこ日とアんこるこく
法こちこ乃武アくこ少方

ちくらくとよひやまつくいろの雪はなとひの影をとこのまん

さこの流の中よりの御すまをとりて東宮乃

うつまつかへしまゐんとて

やうちてそれの弁白

おなしよのつきもはてゝやはらき給んともとまつへきおくら八

大僧都御か精まさふらひけるにまいらせまうさく

くさしいてゝきを給ひける

あまのもりはらの皇太后宮

むかひつるまうのうをかへしぬくちつまんほうの世をさいふもとへ

まいしくは

三条院の皇后宮

誰文の比さて八のつるむつのそくまゝあらぬおもほあしを

とひまうち侍りける女の佛まゐらせけるふさけもの

てうして渡らせ侍とて

さゝの二乃こ

せいしぬきらひのふとまて地ともみへしやはらる家まて

あかほし　中務ての三このむすめ

ふるまうを沙のうちすのふなきいけ世のなかはすみぬなかは

おこなひもし侍けるとさまわれてゆくすゑなみの

きこえちうわけるくては

ちうつるゝ後冷泉院の皇后宮

きのよハゆまてもはるとも　ゆまるとも　ゆまるとも　ゆま

物語

国立公文書館
National Archives of Japan

風葉和歌集巻第八

離別

中務のみこ

おもへどもなほ言はでこそ思ひそめ
ものをやはとは人に問ふべき

源氏のさいのかみ

松風

いさこそはかるるよりのち絶えぬ恋
おなじ中にぞ人は住みける

薄雲

あつまの人

ほのぼのと明くるをまちてつれなく
帰りぬるをぞ人はうらむる

よみびとしらずの

物語四

伊勢物語

いとのかみ

ほとゝぎす
すまにこもりをるものとなのるなり
よるもなくこゑをおしまぬ

須广

二条院讃岐

ほとゝぎす
なくこゑをきくとはなしに
ねをのみぞ
ねのみぞ

内閣文庫

うつ雨
むさしさみ人

同上
けの山てもかくこまる雨をかこをみてのきこめ
そのあのぼくまなのもく

六条院声合

同上
いけるせのうれをらてをてゑ命とへよをかうるのふ
ロのへ
むさしのの人

同上
をくらぬいのちょうめまへのをふとめてのう

百番哥合四十六番
中納言ろうこ侍ていまさえ
くるふ月いあてつとて
えもの和の東文

いのまうを後ふをきく見へ出人みてかをて月球ん法も
海の雨
ちてのこのさの山を見へいて我もいを月をくるつく
ふ後うちて世を庫のう人法のひよをくうを侍
くるよちうこひうてまつのえよをもうをうす
よみ侍る
まつのこやのおくのこ

物語上
くるやや月日のいるををふをまつのこやよりつをそ
月一ちむかの宰相よりのむを法ハ寄る
かむなへ乃こ

同上
ちろこのちへのあみまふたへやるへもちよこてのうをみよ

ちつこうふりてるとて道よりの女のもとよりつかはす

ひる　　ままこの中納言

かさ袈裟ん衣ころもやきかへ衣袖のぬれつまとなるらん

うへ　　山の僧正の母

うへ衣ころもをしぼりて我のみそでもむる袖もとそ呆ぬるき

すまひの君はきてはよりつとそとそとそむとて

ちとの中ねのもとふまつとそよめる

すまひの源氏のすけ

数なへぬ身こそゆくもちそうなんちそよたちもそ陸

かつ屋　　左中将

ぐそむるもんぶこそぬれぬ袖をこそ八野おもけそこそむ

おそむとそもそ又のくるつそよ中そ

敬そそまそこん秋の空まそそもおそつのもそ俗そそるそき

この屋　　源頼亮

中ふ敬の月をそそめて八つそそそれそなのもんむ

石山よいもそむとそ俗るおそつそ女よ

くそこむそ月ふ袖そ乃ふ色をそ八そめそそいのるおの俗そ乃月

ま人　　八之三中納言

うつそそこむ袖そもそ俗そそそそ八そおそつそそ俗そるつそ

物語二

おもひのあまりの袖に日ぐらしなきてのこの歌

はまつの中納言

もろこしの宰相

同上

拾百番合三十三番

あしがきのまことはなくかつとのぼるとくよみまつりける

まつのこやの大将みな

物語上

たちまちはしらねよりつるりをいらるもやよりのおもかるたん

二本

あしがきのこと

物語下

同上

いのちなりけりよのなかのむしろまくいのちよまくるあはれたん

手枕をまくらとりしんと俗名よりまを

はしいる

まつのこやのまろこの后

物語下

秋をのがすむしろ戒をいかなる文まをまさるれば

五一本

この歌

同上

ゆ舟のあとをかの秋の風ぬるもちるくをよ

はしらよりるくよりまを宮

おちくらの中文

物語下

をしめもをひらけるよあるあはを秋くるくるおちれぬ

二本

かくし

大納言宰相の四天

同上

身とはなるべきものとはなるべきものとはなるべきものと

ちゝをまてすむ　つきはとゝ天ゐるゝよの名ハかゝもおゝ
たゝゐるまのゝうゝにたもとゝみるゝ　ゐるゝとゝろまゝわ
くかゝるゝてよめる　女すゝゝの中文　橘ナ実

天ゝとおゝゝてかゝゝぬきゝひの空ゝよゝ空ゝゝるゝゝ　神のゝゝ
んゝゝゝゝおゝゝゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

つまもちのわかる女の法てしてもわかるふてを称し
くかまくら山のうらをつたりあるとをまの一言
をしこのうちにあてをさるとつのそんかく
かまくら山もゆるとしもひとくて我八ちつまたちおくれぬる
このねのさよわまくみちのうへくすあくのうつとなる
ちのうちなる女ちうみやしぬの不の泉
ふのつかいこまも恋そあるのぬまぬそゆまし
天の近あるくのとを伝るようとよ神の
くちりたてまつるく

物語
くいたくあまのを衣をるとをとを天と衣と思ひむなる
清の一色
同上
あつをの源ちうと我方よ志ふぬるまもちうふをみく
しく市のうちもこのをとよくしくそう
をををををふのしのをとををせまつるとる
ちなむ

たををうのうやひめ

羈旅
あふさをとをゆをるとをとをある

う

拾遺ふ、納言女

もろともにたれもとまれと思ふらんこのうき世をいとのがれてはかなくもあるかなしさすらふるこよみ作るよるの月にの冥に

まろこそ秋のしるしなりけれ

あつまの人まろたる時ちよくよめる

はるまのこ信濃

地毎にあそれなるるまひの色にこそ山をくよるらん

よみひろ次

ちるあるふる猿のあををあををあをを式月の伊予むはなの

うちなるそいとよくのそまをまををふをふをふをれ

宮く内上

きいしく

右大将伊尹

きもむ人のいもゆふられの秋風をの花の雲もかさなむ

いろくやの彩井納言

拾百哥合八十九番

あさほらけゆつるるとあ也百

ふるもにあくくこゆるお坂の冥

石ゆまをてくふあさ我をとく

風を吹をこをアのみこ

又ここもむ人よもろをもあ山坂の冥のこよ神をぬきし水

[illegible]

あまくもの空たゝ所を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あきあらくんとしはるふこやとしのくれ　うつりの六月仲秋

吹上の上

あつまおもきをもこそ　歌をこそきくを百首なり

ちぎりおもはしをもこそ　ちぎりさつまのくろうつれる

ていのふこしはるみやこをとそよ

こはるる　あさちこの中屏白

一本菊物語中　八物語

歌をこそきくの名よあきをはのふるてのいろつてもむ

ちつるもおしふるんとをもこそさまくはる

ゝ神ちのなくれをこ

あきやの屏白小方

ちの孫よをこそいまつて接のをこしあるこの地をよ

すこのえよはるをと屏白よいさおをこそ歌

よのをとをふ雲務のこえまより杉の木をを

をををこえをしハすこをこの屏白小方

をををこのすをはの杉のこれぬるふ

すまのりあしよをつるををこやをる人

ふはををを移へはる

明石　六条院御うる

捨百番合三十一番

をををよも思へやるふをこはしをををこをこ

をををかをとをる女のゆをよすをたををををはる

くるるかの女のまゝふけるまくらけり

しのゝめのうゝみ一社の浦よりもいとゝくやうちつまきをと
又よくもはらへくらわけふかるこもの
あゝしきこゝろよりうゝるくもゝりこゝ
よくるふくゝうをやくゝむさゝへもあるゝ
ゝまくよめる　源氏のさゝ乃小式女

玉葛
ふるゝへもをしをこゝとおぼゆるものゝうゝ思ひるゝあ風こゝゆる
つゝゝまつのゝるゝゝ

玉ゝゝの内侍の歌

同上
りゝさゝもゝゝぬふゝゝふ無もゝ風ゝまゝ風ゝるゝ方ゝゝゝ
まゝゝゝくゝゝゝゝゝゝくゝ

物語上
ゝゝ物語
天の原おゝゝゝはあいゝゝゝかゝまゝゝゝゝゝゝ毎のゝゝくゝゝ

松浦文集氏九

同上
かゝゝゝるゝゝゝの山の月新ゝゝ毎のゝゝにおゝゝゝゝゝ
よの中いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

つくしへのつかさなる人まうくはのつかさを
おなじくみるのひとをてまさくつかさまして六
中将の五つのうかさいしを思ひ出
まさひの修理亮
おきなるあいたよりもあかまくるあいあはしを思き
毎月おなじくるふちみのくらもつのれいよめる
こうくもなひくきもきるるるほのふくよもまさるあるる
かろうまくかやるたちの女と思ふまく
まさ松の中納言
物語一
拾百五合九一番
月のかのこつのまつくれ物語拾百
秋の夕をあはれめく
物語一
おくくるも雁なつくもとの花も雁の声もうらとやなる
おふしくるくる月とくくよめる
物語中
まつくのこやの三位氏
雨のふる日
ちくさ屋とはいを手ひの君まくいくるくさくるの
物語

風雅和歌集巻第九

哀傷

ちぐさの思ひ出でぐさ年もたち
うつり侍りにしかば いたづらの宮居
いのちまさりなれもとしのくるるにわかれ
おもひこそ侍りけれ月日つもり
あはれまさりて侍りける

冨士

あさましきまでもすぎにしかの神よ雲のそなたの
母のおもひよ侍りけるころ梅壺のこまいの
おりしろさとうんでよめる

志もなき冬の枝にもえぬべきこころをなぐさめ
冨士中文のまよおもひもよらぬ侍りける法
梅の花はなにさきおくれたるを
おもしろくおぼえけるを

やうもなくその宣耀殿女御の
のもとにつかはしける人のもとへ
のもとの梅の花はなにさきおくれ
ぬるをみてのちすこし侍り
けるをのこのいまはのこころ残り

多雲院の尼のおくりまうけ
やよひのはつかのころ

白ひ物語

はるあれどうぐいすなきぬそよさらばかくれなやこの梅も
やよひのはつかのころ

柏木

のさうを御らんするもあだの御かへのそうを
ほめ申し候て申上てのまを給る
ときさうの春は御うる
万せんたのみてきこゆ家よりもむこうたちの名ふうこう孫
御のうの屋　宮内卿
うこう殿の宗旨もうねんくもむりのまとりぬる
さうの花うまきさをのうのちきいのこやうち
のおきまんは所よ。もみ俗ゆるるのうる乃む
さうりのうくよりまをぬと御らむむうう
六条院御うう

幻
百番哥合六十三番
くくはくくあくくやくくうんなうくんのひくはまのくくゆ孫を
かくれ木の花の梢の酒ゆ分まりてほゆつくのを
のくうくさよひくをよかくみくゆのくうくる梢
くくくく
源氏の殿仕太政大臣

柏木
木のくまのこうくよぬまくくさくまゆ家の衣きくるまくく
御梅花大臣

同上
うくめやゆ家の衣くれくくよ春よりさくよむのくうくん
さうの花うまくくをくくくるくくまくつくのの日
一くを仕くくくく

かやうちをとこの物おぼえ侍

一条の大おとゝいまうちぎみ殿うへ神のいさめ侍るらん

やんごとなきしまのたゆたひのうちに

つるぎ　　ゆたかなる

神よいのちをまもれ　夜夜さゝやかるる祢ぎとめて

むかし君のうへ人のうをゆくのちほこらんの

なをうるをとこをのぶ

六条院御産

幻

あさうへ人をゝのまるゝよのむかるゝ心地

女三宮のいとけなくほこらんのなをゝ

うるもの　　ゆんをうて

御島　　あさうへの事

御ふくよりおぼすまゝにうるはしくうへの

さゝやかなる愛宮の神よおさえ　秋の夕宮

むかしをもとめ人をゝなをゆくる秋夕宮の

おゝのゝのゝもこのうのゝのゝ

思ひのゝ事ゆきをゆくる

御法
百番哥合六十六番

ちぎりおきしたのくちなはくちぬとも　神よりかけてまもるらんこそ　物語百

一条院うせさせたまふ冷泉院の一品宮ひとりとのこれば

むもれおもふの一条院女一宮

あるときやみのうちに清涼殿にて雷のなりしかば

弘徽殿女御只今はいかなるよ御ともせい

あるべきなりしかば　神ぬしの女院

こまもこはのうへにまもりてとあるそのあるかの

宮方ちかくなりぬるとてよみ侍

おなじ　太政大臣

たのおほいまうちぎみまうけたる女のもとにあさくまいりける

侍りける人のもとにあさくまいりける

恋ヨリ　いくのうちやあるらんとこそ思へども　物語二十六

うつるもしるきむくらよ

内上　人いさこうれしとぞ思ふたのめおきて　そ一本

清らにちかうよおぼえさせ給へりしよ女御よ

おなじ　太政大臣

有しよのくちのもとにてこころにやそこなくも清めつさ

たのおほいまうちぎみまうけたる女のもとにあさくまいりける

侍りける人のもとにあさくまいりける

恋ヨリ　いくのうちやあるらんとこそ思へども　物語二十六

うつるもしるきむくらよ

内上　人いさこうれしとぞ思ふたのめおきて　そ一本

清らにちかうよおぼえさせ給へりしよ女御よ

国立公文書館
National Archives of Japan

つくまをくる　女ましこの先に帝御うく

はるもはなくるゝあるこゝろ原に雲まの雪の雪をぬるゝ

祝さめ乃二番白

ま秋ともそあきこゝ荷ゝもむすこゝ深さくこゝまこゝさうくれ

白川の流の宮居ゝ

御うくまるつくこゝ山もこゝ口をるゝの

もゝの秋うくんまほうく

いそてしのゝの二番白

うくんゝあくまゝふ形くの雪よものゝ本もちゝ秋るゝ

八重間白多まゝわく俗くるゝうくもつるて

ゝめる

秋ゝくまゝふも山里の雪あきあくの夕雲の雪

二番白

長うくゝくゝ雪ゝ山ゝ秋ゝもくゝの夕雪ゝく

左大臣

つゝてこの雪ゝゝ神ゝかくゝ秋ゝ名ゝ秋ゝゝめ雲ん

ゝゝくゝつゝの更衣ゝゝくゝの月の雪つゝくる花

雪ゝくゝをお原ゝめゝゝのくゝゝまを行くる

桐壺

ゝゝのゝくゝも深ゝくゝる秋の月いゝゝもむん深ゝゝのゝと

百　物語百

百番哥合九十四番

八月十五夜信中ねのまくらおとこ（侍）

一めぐりてはるしら侍ん

うやうやしきこの方

かさねあるくらかりと秋のちぎりてこそつゆ行き月日之名を

宇治のあぜのこのいみよこもりく侍るよ月

くまもかうとるる花よめる

この歌大和

徐角

おくまとこと宇川月とたづつひよすむこさ世あるね

しのぶくこのよひ侍る女のおくもりよりるあく

まもあをつるよむしのあきけさて

かく孫まつぬる三のこと

女の月ひよ侍るこのもるむしのこゑ

のこもこてろ侍るをこ

ちの月のまれの歌アつのこと

中納言為まるもるこ侍るのよおのよ侍の雪や世こ

小侍ふ

ちつよ侍の歌公

ゆくふこるのもまくこ世ふるる秋ちこの数を

十月つりの坊の清ぬこ侍ふ六乃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

女の品いとく侍るふしゝのくまをぬるもお
もつの花ゝ

夏のつもりの雨に

[illegible]

やまいおもゝ[illegible]まゝ[illegible]とゝるまうく
さわゝもうちすてゝ[illegible]やゝしゝの[illegible]を
[illegible]

源氏のきゝ法の重衣

相壺
百番哥合四十四番
[illegible]

[illegible]を[illegible]る
かさゝあゝむゝ[illegible]命(小末)[illegible]

清の[illegible]

[illegible]

中[illegible]のこゝ[illegible]

[illegible]

有[illegible]の[illegible]の[illegible]

[illegible]

清の[illegible]

[illegible]

やまひ[illegible]
こゝろ中[illegible]
やこのうつの大納言殿
きのめてもこのせをよりやまひ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

一のふるさの一首は

[illegible]

先帝の御ときのよみ侍る

女まうでの年ね

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六条院御うた

葵

[illegible]

同上

百首哥合六十首

[illegible]

[illegible]

[illegible]

らんくのちなるしのまゝ女このこゝをおもひ
こゝろゆゝて
ゆくもいまもくゝふこゝはくゝ拾ちくゝふ人ゆの家
世のこゝろとゝまゝくゝ一ゆゝのふるもさ侍て
よめる
ゆくもこゝろいのゆゝ拾ゝくゝゆめ衣ゝもむる浦そ
冷泉院のおほきゝ后いのくゝをゝ一ゆゝの
くゝろゝきゝゆふ月ゆゝるゝ侍ゝおもゆ
ゝゝ月ゆゝもゝゝゝのゝゝわみゝるゝゝて
ゆゝもゝゝあゝゝ一ゆゝ

かゝくゝおつる涙のふち衣ゝ人ゝるゝゝのゝゝ
あゝゝのゝくゝのゝゝゝくのゝゝゝゝ浦ゝ
ゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ

ゝゝわゝゝゝゝゝゝ衣ゝゝゝゝゝ浦ゝ袖ゝふゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

此間脱落アルベシ

いとこのやうに侍るふ

宇治のお殿天

椎本

百番哥合八十九番

もみぢる神とて雪のやうに出て我身を文よおきぬ侍

せちよりはいとる女のうとく侍るのちきとんの

きぬの侍るとて頭注よきんと侍るよ後の

うわうるふやものつうるる侍

ごて中の屏風

後よりうるもの色もかつうるやうに人ふうぬて

入を指改まわるに指大納言のまふつ八

しるる

寒のやうに中の内侍

思ひやる神うるまふうぬようるぬやうに音まの神て

光のとうるなるに十九日のうるに侍

ふうるうるつまに侍うるのうるに侍

そうしの屏風小方

物語

こうる衣たての山路を侍

物語

父のまうぬうる侍うるある

おうるうるの家女房

おうるぬ侍うるの神て

紫のうるうるに侍る一めうるのうるふまよ

うるうる侍うるうる

六条院中将

幻

天つ雲の涙ハさハもあれかなしき物ゝ物語ハ何のまとゝ思ふん

ゝ

院の御うた

同上

人こゝろ我身もまとゐゆゝしおもひなるあこゝ人々わ

一のひゝ内侍殿のいろゝ侍るとまとゝ

ぬさ侍るとゝ

まつねのまゝの左大臣

かゝちあれハ人をハまとゝ我身よ深るとハふゝし

中務のゝ身まゝろゝのちむまゝのまゝ

まゝ

さ侍るの左中将

いゝふゝ天とゝまゝ長ふ我人のふゝてゝ

前面院のゝよ内侍殿ゝ侍るよ宮后ゝのゝ

ふゝひのゝまゝさちろれハ中ゝを侍る

いゝてゝの一の年に

ゝまゝの身のゝゝやゝゝ人の長とふもゝ宮ゝ侍る

父の左のおゝいまゝ天ゝちゝまなりて

ゝのゝとゝあゝれもの孫をあゝ

ゝあゝ侍るゝのちおゝむゝ行ゝ

を侍る御ゝまゝてゝ

うゝの宮御女御

国讓上

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤末葉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

東屋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

もつてよふるの中納言

まさこ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

つ[illegible]

[illegible]

[illegible]

うつりの内侍の

後撰上

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

忠コヲ年ふれとつきぬくらゐ物とそ[illegible]

風葉和歌集巻第十

賀

今上一宮うまれたまふるうやなひの子

ちとせの御そてにしるくそこそ侍るる

おやこの年の春を女御

亀山の宮殿の小松おひそむくらしたそ世の初あり侍

いのこやのうまれたまつをけるよ

うけらの古大臣おもて

蔵宛上

ときわなのおりる中よ二葉より万代ゆるや侍のひめ松

まちとのちとのいのまるをと侍る松よまを侍

くる

天長のよゝせのちめくれ
皇后をうまれ給ふ
きぬのよむすひつゝ
うゝやうのなきむほ
の屋

むちぬいまの朱雀院御宮
おとゝ
ちのまんとはん
一をけるセ歳より女院ちゝ乃
ちゝさ鶴の毛衣
ほ戦ちゝむと侍る御
まゝ乃ちの屋毎

ちゝ宮のよ毛むの鶴のこの世の年も天のゝうん
宇治入道軍にむちゝの笑しまひく
天長を移万世いのゝ心あるふんをのゝうゝしまひ
風ふまふさの女院

大納言まゝよりの七十賀の侍るのゝ
やうゝさ戦ゝえよゝさ行る枝ふれつゝをの乃ゝ乃山は
ちゝのいの祝のひよまゝ侍ゝまゝみて侍
ゝる
大ゝ乃ひの乃ゝ乃の松とたゝめよゝゝ世の祝のひよゝ乃ゝ乃ん
ゝゝみゝいのよゝちゝなゝめゝゝと祝のひの松よむゝんよゝん
さゝの虎のゝさいのゝのゝ子賀正月のおゝ孫よ女
一のゝゝさゝてまつるのひゝるふ御のゝゝ小松の枝ふ

侍従のめ乃と

菊宴

なのれるとしをしらぬ人とてもあきをまつの秋つゆの松かえるとて

いぬこやのもゝおとねまあもゝ俤るつゆとも

あもちほりの女御よつもとゝ

おなじ　仁寿殿女御

蔵冠下

万世のゆゝしくもちるゝ物語おいつる小松よろこぶ秋のひしまる

ふ業院よりちよとゝきあるとも

とゝまつるゝてまつるゝてよみ侍る

若菜上

つのそさひのくの小松をいつまでもとのゐねといのるゝふる

まもつゝの当侍

御のうゑ

六条院御うゝ

同上

小まつ原すゑのよゝひよむ松やゆゝくの系もの系つむこを

おほそおおいはまゝちさゝのむすめのゝやまもの

つゝ侍るゝよさうつさの侍いそよ

ゝうゝくまやの年ね

二条よりうゝ世のゝゝさの高るゝ系ゝ木るゝゝさやのむろ松

かすゝのゝゝのあのゝ中ゝゝをたゝゝぬ松ゝいふ

ゝ戎

梅花笠

ゝるゝくのよゝゝゝ式のあるゝ物語とやゝゝの松ゝゝとまつん

六ゝ松ゝゝま侍侍るゝちのゝさぬつゝさゝて

かすみ所のこゝろをよめる　ふぢはら

春おくれ霞の衣たちぬれば　二品親王

やどにへだてぬ春をもてしる

ゆきとのみ　風にまがふる春の花　陸奥

いまはなにもとゝのへかねつる　女御

ちりやすき中ぬのまくらゆめ

いとやの袖にたゝむ

こゝろ　春のまつのうへにかゝれる

はつ春　ふぢはらのさねたゞ

ひゝよのこゝろ　はるのこゝろをよめる

いそのかみ　ふるの女御

中務のいとこ　のちゝゆる大納言の妻

よもすがらこゝろの花のゆめ　ふるさとの春のよるのゆめ

中納言すけのぶ　のまくらにのこるなみだ

のこゝろ　はるのこゝろをよめる　藤原

をしるしるよ　春のこゝろをしる

吹上上
夏のもかさとる衣うすくなりて
うつりのさまの紅葉哉

同上
まくるしく夏衣うすくなりて
やうやく日ごろ涼しくなりて
紅葉するよ秋のおのまの夏衣
ちぬふことをれいなくよみ侍る

神無月の頃中納言
初もみぢの頃中納言
うちのおと

かくてとくくこゝろゆるぶのもとにて
軍兵をのこる法ふこかゝりもさ侍る秋
さの侍さのつゝてふ

えちぜんいまのおこの兵大夫
二ゝをなるこゝろの松ゝ
ゝ秋を松ゝくるこゝろよくるる
ゝ秋法師元授のゝ
ゝ中まのゝを法師さゝの侍ゝ

桐壺
さゝの院の御方
いゝくゝおくゝもゝのゝ
ゝゝの内大臣をゝ侍ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

吹上下　むし物語

さくのそのよいさくのようにてもしれさくのそこより出るのつん
おのつよきくつかりる秋言陽院まくさくの
えんせきを拾ひくさくの下れいのみのさくろ
さくを　よさひさくらひ　さ門称

天くさくを拾も月の秋まくもくみてくさくる巣くのらさくの
九月十三夜うくの声おくさくのつくてよくさくる
はくさくの左大臣

我くさくを天くさくを我ハくさくねハ月くん秋の数くくくくくを
さくの院のめ千市殿の院おくさくの右月やくく
さくくくたのいくさくのくさくねくさくふ

おまのもくさくの院市くく
くさくるゆくるのつくらまくくくく

たたみ

きのふつよのとふすまに月をかきそへられもさやかなる
みかの帝の乃日おほろおぼろとかすみてまつをけ
るふまきまさせなる

一ふくのさきのかたの御方

ものかへぬどきをの山の少将京をの橋をえのをとをふ
冨士を指中納言まれ侍るよつをされる
きぬのたもとは法々しれ侍る

あさくらの皇太后宮

まつのすまちもむる毛衣ハをもふぬため春をの

帝の御

ものこゝろをもとめまとるる毛衣をまちをれをおきはかき
中納言ちをるものをゝ侍るを七月よりて
のきぬやるゝくよある

こゆきの御ぞのゝの女

ふる世ををよゆつくゝれてこの宮るをまつ鶴の毛衣
ゝとものをきもゝと年をとゝ人をたて

いゝあゝゝの母

むをるつゝみまあゝふ鶴のゝ我万安をゆつりもん
九のおほいまゝちをよさゝの俗の女一ゝゆゝ

[illegible]

藤原君

[illegible]

同上

[illegible]

田崎村鳥

[illegible]

朱雀院御歌

[illegible]

同上

[illegible]

いぬのこやのこぬやなしにこう称のこしよこ

こ[illegible]

[illegible]

蔵冠上

[illegible]

おなしこふやよりみ侍る

[illegible]

祭使

[illegible]

一条のいのさとまるるをけるよ[illegible]

波のめゆのこしの御歌

[illegible]

入道左大臣

[illegible]

中務のきみ

おもひしれの中文亮

[illegible]

菊宴

[illegible]

[illegible]

人の家よりそのあるいまうるさする所

民部さう稀まさ

同上

[illegible]

人のいつよりもちもの[illegible]

[illegible]

同上

我宿のふるもちもふるとりはふるさと

大納言九条の七十賀の屏風ふるさと月もうつ

物語下

しまるところ　よろこ人　しし　おちく

[illegible]

圖書寮文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan